

<p>ドローナ (Droṇa / Ācārya) 1章2節</p>	<p>カウラヴァ・バーンダヴァ両陣営のかつての師。武術・戦術の教育者。 ブラフマン（僧侶階級）でありながら、戦士としても超一流。 ドゥルヨーダナからの厚遇に報いるため、カウラヴァ側に立つが、心はバーンダヴァに近いというジレンマを抱えている。 この節で名前と呼ばれていないが、「Ācārya（先生）」と呼ばれている。</p>
<p>ドリシュタデムナ (Drishtadyumna) 1章3節</p>	<p>バーンドゥ軍総大将。ドラウパディーの兄。 ドルバダ王の息子として生まれ、“ドローナを倒すため”に生まれた戦士とされている。 皮肉なことに、彼を武術の達人に育て上げたのが他ならぬドローナ。 この節で「あなたの弟子であり、知性ある者」と形容されているが、それは裏返せば「あなたを倒すために育った人物」という皮肉。 この構図は師弟関係の業（カルマ）や宿命を象徴している。</p>
<p>ビーマ (Bhima) 1章4節</p>	<p>バンダヴァ兄弟の次男。力と怒りに満ちているのに、それが家族愛と義のために使われている。 戦いにおいても、「正義のためなら徹底的にやる」タイプ。ギーターでアルジュナが頭と心なら、血と骨。 ドゥルヨーダナの横暴には常に怒りを抱いており、復讐心も強かった。 高貴で誇り高く、義に生きる王。かつてドローナと友情を持ったが後に敵対関係に 特にユディシュティラとドラウパディーを守るためには命がけ。弟アルジュナにも深い尊敬と友情を持っている。 亡命時代には、家族を守る盾として徹底的に尽くす姿が描かれる。文字通り“巨漢”で、食べる量も戦う体力も超人的。</p>
<p>ユユダーナ (Yuyudhāna) ※別名：サーティヤキ (Satyaki) 1章4節</p>	<p>バーンダヴァ陣営の中でもかなり重要かつ信頼された戦士の一人。 特にアルジュナの親友であり、クリシュナの弟子であり、ヤーダヴァ族の誇り高さ將軍として、 クリシュナに仕えながらも、自立した意志を持つ忠義の弓士。 戦場においても、名声ではなく誠実さで信頼を集めたタイプ。 クリシュナの忠実な弟子、アルジュナの親友・戦友</p>
<p>ヴィラータ (Virāṭa) 1章4節</p>	<p>マツヤ国の王 (Virāṭa Rāja) バーンダヴァの亡命中に彼らを受け入れた庇護者。娘ウッターラはアルジュナの息子アビマニュと結婚。 バガヴァット・ギーター1章では、ドゥルヨーダナが名前を挙げるほど、 「アルジュナやビーマに匹敵する勇士」として評価されている。 彼自身も前線に出て戦い、老いてなお現役の王として名譽ある最期を遂げる。 助けるより信じて待つ。彼の存在は、アルジュナやビーマのような“力の象徴”とはまた違い、 「優しさが戦の勝利につながる」という裏の支柱になっています。</p>